

# 宮崎伝統野菜の次世代継承に向けた食育活動がもたらした影響

## The Influence of Food Education Programs for Passing on Miyazaki's Traditional Vegetables to the Next Generation

松岡崇暢（農村社会学研究室）

工藤七海（地域資源創成学部）

山崎有美（食品科学研究室）

### 1. はじめに

宮崎県は温暖な気候風土と豊かな自然環境を有し、数多くの農畜水産物を産み出している。中でも、マンゴー、キンカン、ピーマンなどブランド化された農作物を多数市場に出し、令和3年度における宮崎県の農業総産出額は3478億円<sup>1)</sup>であった。その一方で、日本には古くから地域ごとの気候風土に適し、食文化を育んできた在来種の伝統野菜が存在する。一般的な伝統野菜の多くは、栽培方法が難しく不揃いで効率的な栽培が難しいなどの理由で、生産者の減少と消費の低下を招いている。最近、伝統野菜は栄養価が高く、味わい深い野菜として再評価をされている。伝統野菜を取り巻く環境は日に日に厳しくなり、絶滅の危機に瀕しているが、先祖代々受け継がれてきた種を残し、次世代に継承していくことは我々の急務の課題である。

食を取り巻く生活環境は、社会状況や地域特性の影響を強く受ける。独立行政法人労働政策研究・研修機構の調査結果<sup>2)</sup>によると、2021年における日本の共働き世帯は1247万世帯となり、調査をしてから最も多くなっている。共働き世帯の増加により、外食や弁当や調理済み総菜などのニーズが高まり、家庭で調理することが激減することで、子どもと食材の関わりは希薄化する恐れがある。このことから、幼少期から食育<sup>3)</sup>活動に力を入れ、食や食材の興味関心を広げていくことが求められている。2015年に

最終改正された食育基本法<sup>4)</sup>では、子どもが豊かな人間性を育み生きる力を身に付ける上で「食」の重要性を示し、家庭や教育現場や地域内で食育推進を盛り込んだが、現状ではノウハウ不足や知識不足により滞っている。

香坂らは伝統野菜の継承について、貴重な遺伝資源として捉え次世代へ継承していくには、環境教育や伝統的知識保全や知財教育を含めた、生物文化多様性を保全できるなど適切な教育が欠かせないと指摘している（香坂ら2017）。食育に関しては教育機関で実施された野菜栽培活動の取り組み成果として、水やりや観察日記つけなどの頻度が多いほど食べ物に興味関心を示す子どもが増加していた。なお、保護者の参加により食事の準備や後片付けなどの手伝いが積極的になることは特筆すべき点であろう（木田ら2013）。他にも、名村・奥田は1年間実施された園児自身が栽培した野菜等をクッキングする食育プログラムの効果として、偏食低下に有効であったことに加え保護者の食意識も高まったことを指摘している（名村・奥田2009）。他に、三食食品群を用いた食育体験プログラムの実施により、栄養バランスの良い食事を選択できるようになった（加藤ら2021）。食育カリキュラムを実施する中でも保育士など身近な大人が、声掛けや野菜の成長過程を説明するなどの意図的介入により、食育効果が高まることを指摘している（小野瀬ら2015）など多くの先行研究で食育の成果が蓄積されてい

る。

以上、先行研究によると食育を含めた教育活動は子どもの食への興味関心を持たせ、栄養を考慮するなど、これからの豊かな食生活を送るうえで不可欠である。更に保護者を巻き込むことで、様々な食に関連する効果が見られることが明らかになった。これらのことを踏まえ、本研究の問題意識は次世代へ伝統野菜を継承していくには、将来消費者ニーズの拡大による生産量の増加を促進させ、持続的に存続を図ることである。そのため、食育活動として宮崎の伝統野菜である佐土原ナスの定植と収穫祭の2回を大学生<sup>5)</sup>と一緒に実施したことで、園児の野菜嗜好の変化、ナスの生育過程の理解向上、食に関わる園児家族の行動変化、保護者の佐土原ナスの認知度向上や使用状況の変化などを明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

### 2.1 研究対象

研究対象は、社会福祉法人木花福祉会木花こども園の年少クラスである、キリン組の園児43名（男児22名、女児20名、不明1名：アンケート調査票で把握した。）に加え保護者を研究対象とした。取り組み内容は、2021年6月に食育活動前に実施した事前アンケート調査票の配布と回収、2021年7月に大学生と一緒に佐土原ナス定植の食育活動を実施、2021年11月に大学生と一緒に収穫祭として佐土原ナスの調理と食事会を実施、2021年11月に食育活動後に実施した事後アンケート調査票の配布と回収を行った。本研究では、事前アンケート調査票と事後アンケート調査票の両方の結果を比較分析する手法を採用した。

### 2.2 調査票項目

事前アンケート調査票の項目を見ていく。項目ごとに説明すると、「1. 家族に関すること」

の項目では、園児の性別、園児の兄弟姉妹状況、保護者の出身地、園児の家族構成、園児の同居家族の農業取り組み状況、保護者の年代、平均的なお迎えの時間帯、食材購入方法、園児と一緒にいく食材購入頻度、園児が晩御飯を食べる家族、SDGsの認知状況などを尋ねた。「2. 園児の好き嫌い」の項目は、嫌いな野菜を選択してもらった。「3. 佐土原ナスに関すること」の項目については、保護者の佐土原ナスの認知状況、佐土原ナスの使用頻度、佐土原ナスを全く使用しない理由、佐土原ナスを使用する理由などを尋ねた。「4. ナスに関すること（保護者と園児と一緒に回答している。）」の項目においては、園児のナス嗜好、ナスのイメージ（ナスの色、葉や茎や花の色、ナスのイメージ）、佐土原ナスの認知状況、佐土原ナスが昔からある野菜の認知状況、世界の中でご飯が食べられない人の存在などを尋ねている。

事後アンケート調査票の項目を見ていく。「1. 家族に関すること」の項目では、園児の性別、園児の兄弟姉妹状況、園児が晩御飯を食べる家族を尋ねた。「2. 園児の好き嫌い」の項目については、嫌いな野菜を選択させている。「3. 佐土原ナスに関すること」の項目は、保護者の佐土原ナスの認知状況、佐土原ナスの使用頻度、佐土原ナスを全く使用しない理由、佐土原ナスを使用する理由などを尋ねている。「4. ナスに関すること（保護者と園児と一緒に回答している。）」の項目においては、園児のナス嗜好、ナスのイメージ（ナスの色、葉や茎や花の色、ナスのイメージ）、佐土原ナスの認知状況、佐土原ナスが昔からある野菜の認知状況、世界の中でご飯が食べられない人の存在などを尋ねた。

事前アンケート調査票と事後アンケート調査票を質的に比較分析する手法を採用したために、基本的に項目は同じだが、食育活動後に変化が起きないと考えられる項目は省いている。

表1 保護者の出身地

	全体	宮崎県内	宮崎県以外 の九州	九州以外の 県	その他	不明
%	100.0	81.4	2.3	7.0	4.7	4.7
実数	43	35	1	3	2	2

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

表2 家族構成

	全体	核家族	三世代 家族	それ以 上	不明
%	100.0	79.1	9.3	4.7	7.0
実数	43	34	4	2	3

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

表3 同居家族の中で農業をされる方の有無

	全体	いる	いない	不明
%	100.0	23.3	72.1	4.7
実数	43	10	31	2

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

表4 保護者の年代

	全体	20代	30代	40代	50代	60代 以上	その他	不明
%	100.0	11.6	48.8	30.2	0.0	0.0	0.0	9.4
実数	43	5	21	13	0	0	0	4

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

### 3. 結果

#### 3.1 単純集計から見た保護者の基本情報および家庭実態

事前アンケート調査票結果より、保護者の基本情報を整理した。表1は、保護者の出身地を示した。回答の多い順に「宮崎県内」81.4%、「九州以外の県」7.0%、「その他」4.7%、「宮崎県以外の九州」2.3%であった。約8割が宮崎県内の出身者であった。

表2は、保護者と園児の家族構成を示している。回答の多い順に「核家族」79.1%、「三世代家族」9.3%、「それ以上」4.7%であった。約8割が核家族であった。

表3は、園児の同居家族の中で、家庭菜園を含め農業をされている方の有無を尋ねた結果

である。結果は、「いる」23.3%、「いない」72.1%で、2割強は農業をされており、7割強は農業をしていなかった。

保護者の年代を表4にて示した。回答の多い順に「30代」48.8%、「40代」30.2%、「20代」11.6%であった。「50代」、「60代以上」、「その他」には回答がなかった。

保護者に食材購入方法について尋ねた結果を表5にて示した。「スーパー」の回答は、95.3%

表5 食材購入方法

	全体	スーパー	宅配	その他	不明
%	100.0	95.3	0.0	0.0	4.7
実数	43	41	0	0	2

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

表6 園児と一緒にスーパーに行く頻度

	全体	行く	それなりに行く	稀に行く	行かない
%	100.0	17.1	41.5	34.1	7.3
実数	41	7	17	14	3

※ 出所：筆者が事前アンケート調査結果より作成

であった。

園児と一緒にスーパーに行く頻度について尋ねた結果を表6にて示した。回答の多い順に「それなりに行く」41.5%、「稀に行く」34.1%、「行く」17.1%、「行かない」7.3%であった。「行く」と「それなりに行く」を合わせると約6割の園児と一緒にスーパーへ買い出しに出掛

けており、園児は食材を見る機会があった。

以上、事前アンケート調査票結果から把握できた保護者の基本情報である。ここからは、事前アンケート調査票と事後アンケート調査票を比較し、食育活動実施後にどのような変化が見られたのか明らかにしていく。

表7は食育活動前後で、園児が晩御飯を一緒に食べる人にどのような変化があったのか示した。食育活動前の回答の多い順に、「母」72.1%、「兄弟姉妹」60.5%、「父」39.5%であった。食育活動後の回答の多い順では、「母」90.7%、「兄弟姉妹」67.4%、「父」58.1%となった。回答順位は同じであったが、食育活動後の上位3項目では回答数が増えていた。

表7 園児が晩御飯を一緒に食べる人

事前	全体	父	母	兄弟姉妹	祖父	祖母	その他
%	100.0	39.5	72.1	60.5	14.0	16.3	4.7
実数	43	17	31	26	6	7	2
事後	全体	父	母	兄弟姉妹	祖父	祖母	その他
%	100.0	58.1	90.7	67.4	9.3	16.3	2.3
実数	43	25	39	29	4	7	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

※ 複数回答

表8 保護者の佐土原ナスの認知状況

事前	全体	伝統野菜と知っている	佐土原なすは知っているが伝統野菜とは知らない	佐土原なすを知らない	不明
%	100.0	67.4	18.6	9.3	4.7
実数	43	29	8	4	2
事後	全体	伝統野菜と知っている	佐土原なすは知っているが伝統野菜とは知らない	佐土原なすを知らない	不明
%	100.0	81.4	14.0	2.3	2.3
実数	43	35	6	1	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

### 3.2 保護者の佐土原ナスの取り扱い

食育活動後に保護者における佐土原ナスの認知状況は、どのような変化が見られたのか表8にて示した。食育活動前では、保護者の佐土原ナスが伝統野菜であることの認知度は67.4%であったが、食育後には81.4%と向上している。一方で、保護者の佐土原ナスを知らないという回答は、食育活動前は9.3%であったが食育活動後は2.3%に下がっている。園児に対する食育活動実施の影響で、保護者の佐土原ナスにおける認知度向上の効果が見られた。

保護者における佐土原ナスの使用頻度は、食育活動後どのような変化が見られたのか表9にて示した。大きな変化として、食育活動前では「使用しない」は25.6%であったが、食育活動後は18.6%に下がっている。一方で、「月1回

程度」では、食育活動前は9.3%であったが、食育活動後では18.6%に上がった。食育活動により、佐土原ナスの使用頻度に大きな変化は見られなかったが、少し上がっていた。

保護者が佐土原ナスを使用する理由について、食育活動前後での変化を表10にて示した。食育活動前後で比較すると、全体的に回答実数は増えていた。中でも食育活動前では、「味が好き」は41.9%であったが食育活動後は51.2%と向上している。

### 4. 保護者と園児と一緒に回答した結果

ここからは、保護者と園児が話をしながら一緒に事前と事後のアンケート調査票を回答してもらった結果を見ていく。

表11は、食育活動前後で園児の佐土原ナス

表9 保護者の佐土原ナス使用頻度

事前	全体	週1回以上	月2回程度	月1回程度	三ヶ月1回程度	半年1回程度	年1回程度	使用しない	不明
%	100.0	7.0	11.6	9.3	9.3	16.3	16.3	25.6	4.7
実数	43	3	5	4	4	7	7	11	2
事後	全体	週1回以上	月2回程度	月1回程度	三ヶ月1回程度	半年1回程度	年1回程度	使用しない	不明
%	100.0	4.7	9.3	18.6	9.3	14.0	23.3	18.6	2.3
実数	43	2	4	8	4	6	10	8	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

表10 保護者が佐土原なすを使用する理由

事前	全体	味が好き	調理しやすい	栄養価が高い	その他	不明
%	100.0	41.9	9.3	2.3	7.0	39.5
実数	43	18	4	1	3	17
事後	全体	味が好き	調理しやすい	栄養価が高い	その他	不明
%	100.0	51.2	11.6	7.0	9.3	20.9
実数	43	22	5	3	4	9

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

表 11 園児の佐土原ナスに対する認知度

事前	全体	聞いたことも見たこともある	聞いたことがある	全く知らない	不明
%	100.0	39.5	18.6	37.2	4.7
実数	43	17	8	16	2
事後	全体	聞いたことも見たこともある	聞いたことがある	全く知らない	不明
%	100.0	76.7	16.3	4.7	2.3
実数	43	33	7	2	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

認知度変化を示している。事前アンケート調査票の回答の多い順に「聞いたことも見たこともある」39.5%、「全く知らない」37.2%、「聞いたことがある」18.6%であった。事後アンケート調査における回答の多い順では、「聞いたことも見たこともある」76.7%、「聞いたことがある」16.3%、「全く知らない」4.7%と変化した。「全く知らない」の回答が大幅に減少し、「聞いたことも見たこともある」が大幅に増加する結果となった。食育活動では、園児が観察した伝統野菜は佐土原ナスであったため、佐土原ナスの認知度を大幅に向上させる結果になったと考えられる。

表 12 は、園児が佐土原ナスを宮崎に昔からある野菜だと知っているのかどうか尋ねた結果を示している。食育活動後の変化を見ていく

表 12 園児による昔からある野菜としての認知度

事前	全体	知っている	知らない	不明
%	100.0	39.5	53.5	7.0
実数	43	17	23	3
事後	全体	知っている	知らない	不明
%	100.0	46.5	51.2	2.3
実数	43	20	22	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

表 13 ご飯を食べられない人の存在

事前	全体	知っている	知らない	不明
%	100.0	67.4	25.6	7.0
実数	43	29	11	3
事後	全体	知っている	知らない	不明
%	100.0	81.4	16.3	2.3
実数	43	35	7	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

と「知っている」の回答が増え、「知らない」の回答は少し減少したが、大きな変化はあまり見られなかった。

表 13 は、世界にはご飯を毎日食べられない人の存在を知っているのかどうかを尋ねた結果を示した。食育活動前では、「知っている」は67.4%であったが、食育活動後では81.4%に増えている。食育活動の実施により、園児は食へ

表 14 園児の嫌いな野菜

	食育活動前	食育活動後
実数	161	141

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

表 15 園児におけるナスの嗜好

事前	全体	とても好き	好き	どちらともいえない	あまり好きではない	嫌い	不明
%	100.0	2.3	27.9	18.6	34.9	11.6	4.7
実数	43	1	12	8	15	5	2
事後	全体	とても好き	好き	どちらともいえない	あまり好きではない	嫌い	不明
%	100.0	9.3	41.9	18.6	16.3	11.6	2.3
実数	43	4	18	8	7	5	1

※ 出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

の関心を持ち更に深めたと考えられる。

事前アンケート調査票と事後アンケート調査票を比較し、園児の嫌いな野菜を 28 種類の中から複数回答で選択させ、その結果を表 14 で示した。食育活動の効果として、事後アンケート調査票では、嫌いな野菜の回答数が 20 も減少した。

表 15 は、食育活動の実施により園児のナスに対する好き嫌いに、どのような変化が見られたのか示したものである。食育活動後は、「とても好き」と「好き」の回答数が増え、「あまり好きではない」の回答数が減少している。

園児達は、佐土原ナスを定植し収穫まで水やりや観察などの世話をしてきた。そのため、ナスへの愛着により、ナスに対する嗜好の変化が見られたのではないかと考える。

食育活動前後における園児のナスに対するイメージについて、園児と一緒に回答してもらった結果を表 16 で示す。事前アンケート調査票におけるナスのイメージについては、「紫」の 34 回答であったが、事後アンケート調査票では 41 回答に増えている。他の回答では「茶」の 1 回答のみであった。葉の色については、事前アンケート調査票において「緑」の 32 回答であったが、事後アンケート調査票では、36 回答に増えていた。茎の色は、事前アンケート調査票において「緑」の 23 回答であったが、事後アンケート調査票では 27 回答と増えていた。一方で

表 16 園児の食育活動前後のナスのイメージ

食育活動前		食育活動後	
ナスの色		ナスの色	
紫	34	紫	41
青	2	茶	1
黒、赤	各 1		
わからない	1		
葉の色		葉の色	
緑	32	緑	36
紫	4	紫	2
青	1	ピンク	1
わからない	1	赤	1
茎の色		茎の色	
緑	23	緑	27
茶	4	紫	5
紫、黒	各 2	茶	4
紺	1	黄、黒	各 1
わからない	3	わからない	1
花の色		花の色	
白	14	紫	19
紫、黄	7	黄	9
ピンク	4	白	7
赤	1	赤	2
わからない	3	ピンク	1
		わからない	2

※出所：筆者が事前と事後アンケート調査結果より作成

※色の濃淡等の回答は統合してカウントした

「紫」という回答は、事前アンケート調査票では2回答、事後アンケート調査票においては5回答になった。花の色については、事前アンケート調査票の回答の多い順に「白」14回答、「紫」と「黄」の7回答であった。事後アンケート調査票では、「紫」19回答、「黄」9回答、「白」7回答の順で多く回答されていた。

全体を通じて「ナス」という野菜に対する、園児の生育過程の理解度は正答が多く、事前アンケート調査票では誤答があっても、事後アンケート調査票では正答が増えていた。また、「わからない」の回答はほとんどなく、何かしらの回答を得ることができた。ただし、茎の色のみ誤答が増える結果となっていたが、茎の色は紫色であるが緑色も混じることがあり区別が難しかったと考えられる。

## 5. 考察

### 5-1. 食育活動による園児の変化

生産や消費が減少している伝統野菜を次世代に継承する第一歩として、伝統野菜の認知度向上が不可欠であると問題意識を持ち、本研究では食育活動の効果を明らかにすることを目的とした。将来の消費者や理解者となる園児に対する食育活動により、食への興味関心を持たせ、更に保護者を巻き込むことで認知度向上や食生活などの行動変化が起きるのか着目した。食育活動に取り組んだ前後に実施したアンケート調査票の結果を比較分析し変化を明らかにした。

大学生と一緒に食育活動を行った園児への効果は、野菜としての佐土原ナスの認知度は約2倍に向上するなど一定の効果が見られた。しかし、佐土原ナスが伝統野菜である認知度は、食育活動後であっても僅かに上がった程度であった。その他に、世界の中でご飯が食べられない人の存在を尋ね、食育活動後ではその存在の認知度は増加していた。

以上のことから、園児は食育活動を実施することで、育てた野菜に関する認知度が向上することが明らかになった。今回は僅かな認知度向上となった佐土原ナスが伝統野菜であることは、こども園の先生などが佐土原ナスの特徴や宮崎の伝統野菜であることを掘り下げて説明することで、認知度は向上すると考えられる。

次に、園児の野菜嗜好変化について見ていく。食育活動前後のアンケート調査票では、28種類の中から嫌いな野菜を選択させ、園児と一緒に回答してもらった。嫌いな野菜について食育活動前では、合計161回答されていたが、食育活動後では合計141回答と減少し、僅かであるが嫌いな野菜を克服することができたようだ。ナスに特化すると食育活動後に「好き」が増加し、「あまり好きではない」は減少するなど変化が見られた。このことから、園児の野菜嗜好は、栽培した野菜においては嫌いから一定数好きに転換する傾向が見られ、更に野菜全般の嫌いが減少することが明らかで食の関心から行動変化があったと考えられる。

食育活動による、ナスの生育過程の理解状況を見ていく。基本的な水やりや観察を通じた食育活動に取り組むことで、ナスのイメージが紫と定着した。葉の色については、緑と理解が促進された一方で、紫が少し加わる葉もあり紫と回答した園児が存在したようだ。茎の色は本来少し緑がかった紫であるが、事後アンケート調査票において緑という回答が増えていた。花の色は紫が正答であるが、事前アンケート調査票には白が多く、事後アンケート調査票では紫という回答が増えている。黄も回答が多かったが、おしべが黄色で目立つことから誤答を招いたようである。全体を通じて食育活動を行うことで、ナスの生育過程の理解は向上していた。食育活動として、園児が野菜栽培の取り組むことで野菜を身近に感じ、全体的に嫌いな野菜が減少し、なお栽培した野菜には興味関心が深まっ



ていた。今後、食への関心につなげていくことが望ましい。

## 5.2 食育活動による保護者や家族の変化

園児を通じた食育活動を実施したことによる、保護者や家族への波及効果として、食育活動後は両親と一緒に晩御飯を食べる園児が増えていた。兄弟姉妹、祖父母などの回答はあまり変化が無く、父や母の両親の回答は増えていた。両親が共に園児と晩御飯を食べる生活環境は、共働き世帯が増える中でとても大事なことであろう。場合によっては、家庭内の食育活動の推進が期待される。食に関する話題や体験などが増えることで、両親と園児共々食への興味関心が深まり、伝統野菜を身近な食材として活用機会の増加が期待される。

保護者は伝統野菜に対し、どのように認識し食材として活用されるのだろうか。園児がこども園で、伝統野菜を含めた野菜栽培に関わる、生長過程を観察し水やりの食育活動を体験することで野菜への興味関心を育むことができた。その体験で得られたことを、家庭内の会話により両親、兄弟姉妹などの家族と体験を共有することもあっただろう。今回は事前後のアンケート調査票を一緒に回答してもらい、伝統野菜について共有されたことは多いだろう。そのため、保護者も園児と同様に伝統野菜の認知度向上という波及効果を得られることができたと考えられる。伝統野菜の使用頻度は、変化はあまり見ることができなかったが、今まで使用しない保護者が減少し僅かでも使用する保護者が増えたことは小さな一歩であろう。その一方で、伝統野菜を使用した保護者は、使用した理由に味が好きを最も回答しており、食べる機会が増えれば味が良いことから消費拡大していくと考えられる。そのために食育活動を更に展開することで、保護者や家族への波及効果を得られれば、徐々に伝統野菜の市場が広がり農

家の生産意欲が高まることで、次世代へ持続的な継承への足掛かりになるだろう。

## 6. おわりに

家庭での食育活動は、ノウハウ不足や日々の生活の中で時間的な制約などから推進していくことにはハードルがある。そのため、教育プログラムの一つとして取り組むことが求められており、長い目で見ても家庭に良い影響を期待できる。本研究では、園児と保護者が一緒にアンケート調査票を回答する箇所を盛り込んでいる。このことにより、園児と保護者に会話が生まれ双方が伝統野菜の認知度向上につながった。保護者を間接的であっても食育活動に巻き込むことで、食材として伝統野菜を使用する、または伝統野菜に興味関心を持つなど家庭で行うことのできる範囲の食育活動につながった。そのことは、本研究の問題意識であった、次世代へ伝統野菜を継承していく上で不可欠な認知度の向上や、消費拡大につなげることができる。消費が増えれば、伝統野菜生産への参入農家が増え生産量はどんどん拡大していく。消費と生産の拡大は、持続的に次世代へ継承していく上で重要なことなのである。

—注—

1) 農林水産省 HP より引用

[https://www.maff.go.jp/j/tokei/dashboard/data/nougyou\\_sansyutu.html](https://www.maff.go.jp/j/tokei/dashboard/data/nougyou_sansyutu.html) (2023年1月12日検索)

2) 独立行政法人労働政策研究・研修機構 HP より引用

<https://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/timeseries/html/g0212.html> (2023年1月12日検索)

3) 農林水産省 HP より引用

<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/network/about/index.html> (2023年1月15日検索)

農林水産省では、食育の見解として『食育は、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けられるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てるもの。』としている。

4) 農林水産省 HP より引用

kannrenhou-20.pdf (maff.go.jp) (2023年1月15日検索)

5) 大学生は、宮崎大学地域資源創成学部食品科学研究室に在籍する大学生である。

—参考文献—

- 小野瀬剛志・堀由里・鈴木純子 (2015) 「保育園における食育カリキュラムと幼児の野菜への関心の関連について」『仙台青葉学院短期大学研究紀要 青葉 Seiyō』6 (2), pp. 79-85.
- 加藤元士・兼安真弓・笠本光希・上田結子・新谷華世・園田純子・乃木章子・田中マキ子 (2021) 「児童を対象とした三食食品群を用いる食育体験プログラムの実施と評価」『山口県立大学学術情報看護栄養学部紀要』第14号, pp. 37-42.
- 木田春代・武田文・荒川義人・大久保岩男 (2012) 「幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果—北海道某市の調査—」『天使大学紀要』Vol. 13 No. 2, pp. 1-11.
- 香坂玲・陶山佳久・山田奨治・佐藤ゆき・富吉満之・内山愉太 (2017) 「伝統野菜からみる生物文化多様性と学際的食育活動を通じた継承の実践」『アサヒビール学術振興財団食生活科学・文化及び環境に関する研究助成研究紀要』32, pp. 1-9.
- 名村靖子・奥田豊子 (2009) 「収穫した野菜のクッキングによる食育効果と保護者の食意識, 園児の食関心との関連」『大阪教育大学紀要第II部門』第58巻第1号, pp. 27-42.

# The Influence of Food Education Programs for Passing on Miyazaki's Traditional Vegetables to the Next Generation

Takanobu Matsuoka (Rural Sociology)

Nanami Kudo (Faculty of Regional Innovation)

Yumi Yamasaki (Food Science)

## Abstract

The present study concerns with sustainable preservation by consumer demand expansion and production increase to pass on traditional vegetables, which have been handed down for generations, to the next generation. To this end, it is necessary to promote awareness of traditional vegetables.

As a step towards passing on traditional vegetables to the next generation, we conducted a food education program with children in a daycare. The objective was to examine changes in preferences for vegetables among children, promote awareness of traditional vegetables among parents and examine change in their usage of traditional vegetables.

As a result of implementing the food education program, children's awareness of traditional vegetables increased and dislike for vegetables decreased. In regard to change among parents, we found an increase in awareness of traditional vegetables and a slight increase in usage frequency. Involving parents in food education programs leads to promotion of awareness and expansion of consumer demand, which are indispensable to pass on traditional vegetables to the next generation. With the further expansion of consumer demand, it can be expected that more farmers will enter the production of traditional vegetables. Increasing consumer demand and production is important to pass on traditional vegetables to the next generation.